



薬局だより

2024 年 8 月

～光線過敏症～

光線過敏症は、太陽光にさらされた皮膚に赤みや炎症、かゆみを伴う皮疹ができるのが特徴です。日光アレルギーとも呼ばれています。原因には様々なものがありますが、今回は薬剤が原因となる光線過敏症のなかから、外用薬を使用した際に発症するものについて紹介します。



外用薬による光線過敏症の特徴

光接触皮膚炎とも呼ばれ、外用薬を用いた部分に日が当たってかぶれ、貼っていた部分を中心に症状が現れます。



光線過敏症を起こしやすい薬剤

非ステロイド性消炎鎮痛剤（炎症を抑えて痛みを和らげる薬）である、**ケトプロフェン**を含む貼り薬や塗り薬、具体的な商品名としては、**モーラステープ**などの肩凝りや腰痛に用いられるお薬が挙げられます。



予防



①患部を紫外線に当てないこと

光線過敏症の最も有効な対策は外用薬を使用した患部を紫外線に当てないことです。外用剤が付着している間は外用薬が紫外線から患部を遮ってくれるため、光線過敏症を発症することはあまりありません。むしろ外用剤による治療後、薬剤が残っている患部を紫外線にさらすことにより発症することが多いとされています。そのため、**外用剤を使用した後 4 週間は患部を紫外線にさらさないようにしましょう**。また、光線過敏症の原因となる長波長紫外線（UVA）は曇りの日でも十分な量が照射されています。UVAはガラスに吸収されることもないためドライブをする際にも注意が必要です。

②紫外線にさらされないためには

UVAを防御するには**衣服・帽子・手袋**などが有効です。また**日焼け止めクリーム**を使用することも有効です。市販されている日焼け止めクリームには、**SPF(UVBを守る指標)**と**PA(UVAを守る指標)**がパッケージに表示されていますが、薬剤による光線過敏症は、一般的にはUVAで誘発されますので、PAで選択してください。

UVAの防止効果は三段階で表示されています。

PA+ : UVA防止効果がある

PA++ : UVA防止効果がかなりある

PA+++ : UVA防止効果が非常にある

予防効果が一番高い、PA+++を選ぶようにしてください。



治療

まず、**薬剤の使用を中止後、患部を遮光**し、約1週間は直射日光を避けるようにします。紫外線にあてると症状の増悪や再燃を繰り返すことがありますので、患部を直射日光やガラスを通した日光にもさらさないよう注意し、皮膚科を受診してください。治療としては、ステロイド外用剤を塗布、痒み強い場合は抗ヒスタミン剤を投与します。さらに、症状が強い場合は、ステロイド剤の内服、点滴静注等も行います。**症状が消えたあとも衣服やサポーターなどで紫外線から皮膚を守るようにしてください。**場合によっては数ヶ月の間紫外線にあたると症状が再燃することがあります。



外用薬以外にも、抗生物質等の内服薬が原因となる

こともあり、薬剤によって症状は異なります。

原因のわからない湿疹やかゆみなどの症状が現れ

た場合は、速めに受診し、適切な診断や治療を受け

ることが大切です！！

